

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02302

研究課題名(和文) ドイツ・モダニズムの黎明期 作品、理論、パトロンの美学・歴史研究

研究課題名(英文) The Dawn of German Modernism: Aesthetics and History of Artworks, Theory, Patronage

研究代表者

仲間 裕子 (Nakama, Yuko)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70268150

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ・モダニズムの黎明期を「ベルリン分離派」の設立(1898年)と「ドイツ美術の100年展」(ベルリン国立美術館、1906年)を中心に捉えた結果、芸術家、美術館、パトロン・コレクター、そして学問・思想が連携してモダニズムの潮流を支えた歴史的事実が明らかになった。また、モダニズムの展開には大都市ベルリンの国際主義が影響を与えたが、なかでもジャポニズムの動向は、東アジア美術館が1906年に設立されるなど単なる一過性の流行ではなく、モダニズム運動の活性化にも貢献したことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヴァイマル黄金時代のアヴァンギャルド芸術の先行研究は国内外に多いが、それ以前の19世紀末から20世紀初頭までの研究は極めて少ない。しかし、1871年にドイツ帝国が成立し、皇帝の権力やナショナリズムが芸術領域にも侵入するなか、モダニズムの台頭にはメトロポール・ベルリンの国際主義に基づく文化力が反映している。また、このテーマに関する国際シンポジウムを開催したことでドイツと日本の共同研究も実現し、世紀の転換期のベルリンで展開したモダニズムの解明に向けて学術的意義があったと考える。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the establishment of the "Berlin Secession" (1898) and the "Centennial Exhibition of German Art" (1906) at the National Gallery of Berlin, this research reveals the historical facts that artists, museums, patrons, collectors, scholars, and thinkers united to support the flow of modernism. It is also clear that internationalism in the metropolis of Berlin influenced the development of modernism, and that trends in Japonism, such as the establishment of the Museum of East Asian Art in 1906 in particular, were not just a temporary phenomenon, but also contributed to the revitalization of modernism.

研究分野：西洋美術史・美学

キーワード：ドイツ・モダニズム ベルリン国立美術館 「ドイツ美術の100年展」 フーゴ・フォン・チューディ  
パトロン・コレクター マックス・リーパーマン ユリウス・マイアー＝グレーフェ

## 1. 研究開始当初の背景

1910年以降のヴァイマル時代のアヴァンギャルド芸術(ドイツ表現主義、新即物主義、ダダイズム等)に関しては国内外にすでに多くの先行研究があるが、それ以前の19世紀末から20世紀の転換期のモダニズム台頭についてはほとんどない。F.フォスター・ハーンが指摘するように、これまで不当にも「一般に軽視されてきた」研究対象と言える。<sup>1</sup> ベルリン国立美術館で1906年に「ドイツ美術の100年展」を開催し、モダニズムの活性化に貢献した館長フーゴ・フォン・チューディ(1851-1911年)に関しては、本国ドイツにおいても『マネからファン・ゴッホ:フーゴ・フォン・チューディのモデルネの闘い』(展覧会カタログ、1997年)以来、研究は深化していないように思われる。前述した「ドイツ美術の100年展」やベルリン分離派の設立(1898年)、ユリウス・マイアー＝グレーフェ(Julius Meier-Graefe, 1867-1935年)の『近代美術の発展史』(1904年)などによるモダニズムの展開を世紀転換期のベルリンを中心として調査・考察する研究の必要性は高いと判断した。

## 2. 研究の目的

チューディは印象派やロダンの作品にいち早く注目し、ベルリン国立美術館のマネの(温室にて)(1878-79)は、欧米の国立の美術館がはじめて獲得した印象派の作品であり、母国のフランスに先を越した。多くはユダヤ系の資本家であるパトロンたちもチューディの計らいでモダニズムの動向を支持した。このように、芸術家、美術館、美術史研究者、画商、パトロン、コレクター、出版社の共同体的文化活動がモダニズムの波を引き寄せたとと言える。1871年にドイツ帝国が成立し、皇帝の権力やナショナリズムが芸術領域にも侵入するなか、モダニズムの台頭にはメトロポール・ベルリンの国際主義に基づく文化力が反映している。とりわけドイツ・モダニズムの展開に並行し、ベルリン独自のジャポニズムの研究も求められている。

## 3. 研究の方法

チューディとベルリン国立美術館(現ベルリン旧国立美術館)に関わる問題であるので、当美術館、美術館付属アーカイブ、図書館、そしてドイツで最多の芸術関係図書の所蔵数で知られるミュンヘン中央美術史研究所、また京都でチューディが1899年にベルリン国立美術館のために購入した刺繍屏風について調査を行った。なお、ベルリン旧国立美術館館長ラルフ・グライス氏、および千總文化研究所所長の加藤結理子氏に調査協力をいただいた。

## 4. 研究成果

1896年に新たに国立美術館長の座に就いたチューディはプロイセン色を強めたナショナル・ギャラリーを憂い、政治的ではない、美学的な考察を基にした美術館構想の実現をめざした。彼はアルノルト・ベックリン(Arnold Böcklin, 1827-1901年)、ハンス・トーマ(Hans Thoma, 1839-1924年)、マックス・クリンガー(Max Klinger, 1857-1920年)といった同時代のドイツの画家だけでなく、ファン・ゴッホ、セザンヌ、マネ、モネ、ルノワールなどのフランス近代美術の優れた作品を積極的に美術館のために収集した。就任直後に、ドイツ印象派の画家で、近代美術運動のマックス・リーバーマン(Max Liebermann, 1847-1935年)とともにパリを訪れ、デュラン・リュエル画廊からマネの代表作(温室にて)(1879年)を獲得している。これはそもそも欧米の美術館が最初に購入したマネの作品であった。チューディが1909年までの在任中に獲得した外国の作品は、バルバラ・パウルの調査によれば、128点に及び、その中心となるのは印象派、ポスト印象派を包含するフランス美術である。(波)(クールベ、1869-70年)、(Pontワーズ附近のクーラーヴルの製粉小屋)(セザンヌ、1881年頃)、(夏)(モネ、1874年)、(ヴァルジュモンの子どもの午後の午後)(ルノワール、1884年)などで、これらの傑出した作品を見ればチューディの先見の明と鑑識眼をうかがい知ることができる。<sup>2</sup>

### (1)「ドイツ美術の100年展」

チューディは1900年のパリ万国博覧会に並行して開催されたフランス美術の「100年展」の見学後に、「ドイツ美術の100年展」の企画に積極的になったと伝えられている。フランスの文化的高揚を示す機能を果たした展覧会ではあったが、時代の新美術を軽視した失望感がチューディを動かしたという。

「ドイツ美術の100年展」は、フランス近代の外光主義あるいは自然主義を範として作品を分析することによって、ドイツ美術を“近代美術”として国際的な舞台に踊り上げさせようとしたのである。なかでもリーバーマンの作品を、「印象派的な色彩の潜在性に発展する確実な出発点」<sup>3</sup>と解釈しつつ、フランス印象派とは一線を画す、空間表現における線描の力を讃えている。総じてチューディは、アカデミー派の歴史画優位から風景画への移行を重視し、人間と自然との出会い、自然への接近という立場から解釈する。結果的にはこの美的判断法によって、それまでは忘れられていた画家も取り上げることになり、ドイツ・ロマン主義の画家、カスパー・ダーヴィット・フリードリヒが再発見されるなど「修正展覧会」<sup>4</sup>としての「100年展」の目的が実現されたのである。

チューディのこのような活躍は、第一に現場主義として彼が自分自身の眼を信じたことに基づいているが、リーバーマンやマイアー＝グレーフェなどのご意見番にも恵まれていたことも幸いした。チューディの活躍の第二の要因として挙げられるのは、彼を支えたパトロンの存在である。美術館への購入作品を選考するプロイセンの美術コミッションは皇帝の息がかかったアカデミー派で構成されていたので、チューディは近代美術作品獲得のために、後援者から贈与金を積み立てるという方法を編み出さざるを得なかったのである。これが「チューディ・シュペンド」と言われる絵画購入のための基金であった。パト

ロンたちのなかではユダヤ系の銀行家や大企業家が目立ち、なかでもエドゥアルト・アルンホルト (Eduard Arnhold, 1849-1925 年) とロベルト・フォン・メンデルスゾーン (Robert von Mendelssohn, 1857-1917 年) の存在が大きい。こうして近代美術の理解と普及という共通目的に向かって、美術館と市民階級との相互関係が強化されたのである。

## (2) チューディのモダニズムと日本

チューディは国立美術館在職中に、ドイツ近代美術とともに、フランス近代美術中心にヨーロッパの絵画・素描、彫刻の収集に力を入れた。しかし、唯一西洋に属さない国の、しかも工芸品がある。<sup>5</sup>それが、美術館の所蔵目録に大橋松次郎作と記載された刺繍屏風の《京都郊外の桂川の急流》である。ベルリン中央アーカイヴやベルリン国立図書館を調査したところ、いくつかこれまで公表されていない新しい資料が見つかった。チューディが獲得したこの《京都郊外の桂川の急流》は、ベルリン国立美術館所蔵目録で「日本の六曲屏風。絹の刺繍、寸法は 168x360cm」と登録されている。今回の調査で、大橋松次郎は作者ではなく、京都の西村總左衛門商店の幹部であったことが判明した。中央アーカイヴには大橋松次郎の名刺が保存されているが<sup>6</sup>、チューディが実際に会ったかどうかは不明である。なお、ドイツの皇族が西村總左衛門商店を訪問した 1904 年の写真<sup>7</sup>が残っているが、この写真の皇族カール・アントン氏は、宮内省作成の外賓接待録に記載された「ドイツ皇族カール・アントン・ホーエンツェルヌス親王(名の表記は資料のまま)」<sup>8</sup>である可能性が高い。ホーエンツェルン家はプロイセン王家で、ベルリン国立美術館にも歴代君主の胸像が並べられていた。これは、パリ万国博覧会での西村總左衛門の評判がドイツにも十分届いていた事実を証しており、したがって、チューディが国立美術館のために獲得した刺繍屏風も西村總左衛門商店が制作した可能性が大きい。この《京都郊外の桂川の急流》は、同じく西村總左衛門の《嵐山春秋図》(1890 年、宮内庁所蔵)に類似する作品でなかったかと推察される。筏と相まって保津川のダイナミックな流れを見事に表現しているからである。

チューディは皇帝と皇帝派との確執を経て 1909 年に館長の職を解任されるが、1908 年からの 1 年間の強制的な休暇中に日本を訪れている。チューディの日本滞在については、これまでほとんどドイツで言及されていない。パヴェッテ・バルンケによると、日本美術についての画集や講演論文など豊富な文献がすでに 1890 年代から美術館の図書館で収集されていたが、チューディはベルリン美術館考古学部門長のテオドル・ヴィーガントの誘いを受け、日本への旅を決心したようである。<sup>9</sup>しかし、考古学者の「テオドル」ではなく、ドイツの大手海運業の北ドイツ汽船会社最高責任者「ハインリヒ・ヴィーガントの間違ひではないかと思われる。ベルリンでの調査の結果、京都の都ホテルから 1908 年 10 月 24 日にハインリヒ・ヴィーガントに宛てたチューディの手紙<sup>10</sup>が見つかった。この手紙によれば、神戸で下船し、京都では「日本の真の生活を知り、秋の快晴のもと素晴らしい寺院と二つとない美しい街の周辺を歩き回っている」など、感謝の辞とともに滞在の様子が記されている。なお、ベルナルド・マーツによるチューディの書簡の調査によると、モダニズムの支援者であるハインリヒ・ケスラー伯爵に、箱根から 1908 年 11 月 22 日に葉書を出している。<sup>11</sup>

チューディの旅に同行した、カール・ケプリング(1848-1914 年)は画家で銅版画を得意とし、プロイセン芸術アカデミーの教授を務め、浮世絵も収集していたという。また、ヴァルンケは、チューディは日本滞在のアドヴァイスを若い画家で詩人のフリッツ・ルムプ(1888 - 1949)から得ていたと推察している。<sup>12</sup>ルムプは、ベルリンで 1894 年に設立した「パン」に因んで日本で結成された反自然主義、耽美派の「パン」の会に、木下杢太郎を通して参加していることが分かった。北原白秋もルムプについて短いエッセイ(『フリッツ・ルムプのこと』『近代風景』2 巻 1 号、1927 年)を書き、野原宇太郎はさらに詳しく日本でのルムプ像を紹介している。<sup>13</sup>同名の父、フリッツ・ルムプも画家で、彼のポツダムのヴィラには、アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ、リーパーマン、「ドイツ美術の 100 年展」の装飾を担当したペーター・ベーレンス、そしてロヴィス・コリントなど、当時ベルリンの近代的な芸術を推進していた人たちが集まり、チューディもそのサークルに属していた。若いフリッツが日本への関心を深めたのも 1905 年にベルリンで開催された「浮世絵特別展」だったという。なお、コリントが描いた《ルムプ一家》(1901 年、ベルリン旧国立美術館蔵)のなかに、少年ルムプと思われる横顔がある。

チューディがパリで 1906 年に手に入れた、ゴッホの《坊主の自画像》(1888 年)は、ゴーガンの自画像と交換する目的で描かれたものだが、日本の僧として自己演出したものでジャポニズム研究の重要な作品として知られている。チューディのモダニティとは、印象派を中心としたフランス近代美術から発展し、ドイツ美術にもそのモダニティを重視したが、ゴッホと同様に 19 世紀末から日本の美術・工芸への関心を強く持ち、日本と日本美術への親近感を常に失わなかった。チューディが《坊主の自画像》を手に入れた理由もそれに起因するのではないかと考えられる。<sup>14</sup>

ベルリンを離れたチューディは 1909 年にバイエルン王立美術館館長に就任した。皇帝に許可が下りなかった作品を含めて、ベルリンで収集した近代美術をミュンヘンに移動させ、現在はミュンヘンの近代美術館、ノイエ・ピナコテークの所蔵となっている。ピナコテークのハイライトとして紹介されるゴッホの《ひまわり》(1888 年)、セザンヌの《たすのある静物》(1885 年頃)、モネの《アルジャントイユのセヌ川の橋》(1874 年)、ゴーガンの《誕生》(1896 年)はどれもチューディが獲得した作品群である。

チューディは、さらにカンディンスキー、マルクを中心としてミュンヘンで結成された「青騎士」を支援し、1911 年の「第 1 回青騎士展」開催の実現に力を尽くした。『青騎士年鑑』は、この書の完成間近で難病で亡くなった彼らの支持者、チューディに捧げられている。

2019 年 5 月に本研究テーマの成果発表として、国際シンポジウム「ドイツ・モダニズムの黎明期とベルリン」(主催: 科学研究費助成事業基盤研究 C、共催: 立命館大学国際言語文化研究所)を開催した。

ラルフ・グライス(ベルリン旧国立美術館)、ペトラ・クールマン＝ホディック(ドレスデン国立美術館)、高橋秀寿(立命館大学)、池田祐子(京都国立近代美術館)、三木順子(京都工芸繊維大学)、尾関幸(東京学芸大学)、佐藤直樹(東京藝術大学)各氏と仲間裕子(立命館大学)が、美術館、美術館展、美術作品、建築、美学思想、ジャポニズム、パトロン・コレクター、そして歴史・政治的背景について報告を行い、20世紀への転換期におけるモダニズム運動の重要性をあらためて確認することができた。この成果は『言語文化研究』(第31巻4号、立命館大学国際言語文化研究所、2020年)に特集として掲載されている。

---

<sup>1</sup> François Forster-Hahn, *Imagining Modern German Culture: 1889-1910*, Washington, 1996, P.10

<sup>2</sup> Barbara Paul, *Hugo von Tschudi und die moderne französische Kunst im Deutschen Kaiserreich*, Mainz, 1993.

<sup>3</sup> *Ausstellung Deutscher Kunst aus der Zeit von 1775-1875 in der Königlichen Nationalgalerie Berlin 1906*, Bd. II, S.XXXVI.

<sup>4</sup> Sabine Beneke, *Im Blicke der Moderne, Die „Jahrhunertausstellung deutscher Kunst (1775-1875)“ in der Berliner Nationalgalerie 1906*, Berlin, 1999, S.78.

<sup>5</sup> チューディによって 1896-1911 年に、ベルリンとミュンヘン美術館所蔵になった作品群を整理したバーバラ・パウルの調査による。(Paul, *op.cit.*, 1993)

<sup>6</sup> SMB-ZA, I/NG 993, *Geschenke und Vermächtnisse 1899-1903*, Nationalgalerie.

<sup>7</sup> 『京都老舗の文化史—千總四六〇年の歴史』展覧会図録、京都文化博物館、2016年、46頁。

<sup>8</sup> 辻岡健志「宮内省の外賓接待と大津事件 - 宮内省作成公文書類の生成・編纂を中心に」(『書陵部紀要』)第66号、2015年、40-60頁

<sup>9</sup> Babette Warncke, Hugo von Tschudi: Biographie, in: Johann Georg Prinz von Hohenzollern, Peter-Klaus Schuster (Hg.), *Manet bis Van Gogh, Hugo von Tschudi und der Kampf um die Moderne*, Berlin, München, 1996, S.451.

<sup>10</sup> Staatsbibliothek zu Berlin, Handschriftenabteilung, Nachl. 495.

<sup>11</sup> Bernhard Maaz, Hier handelt sich's nicht blos um ine Persoenlichkeit, sondern um ein Prinzip, Hugo von Tschudi im Briefwechsel, in: *Jahrbuch der Berliner Museen*, Staatlichen Museen zu Berlin, 2003.

<sup>12</sup> Warncke, S.451.

<sup>13</sup> 「フリッツ・ルンプ」(野田宇太郎『日本耽美派の誕生—パンの会改訂増補版』)、河出書房、1951年、183-199頁。

<sup>14</sup> (坊主の自画像)は、1909年にチューディとともにミュンヘンに移動したが、1938年に退廃美術としてナチスに押収され、翌年ルツェルンのオークションで売却された。現在はハーバード大学附属フォッグ美術館所蔵。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 仲間裕子	4. 巻 4
2. 論文標題 ハンス・ベルティンクのイメージ論について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 形象	6. 最初と最後の頁 16-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲間裕子	4. 巻 29巻4号
2. 論文標題 C.D.フリードリヒのロマン主義的風景と文学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 171-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 仲間裕子	4. 巻 31巻4号
2. 論文標題 フーゴ・フォン・チューディのモダニズムと日本	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 107-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 仲間裕子
2. 発表標題 ディレクタンティズムと近代社会：カール・グスタフ・カールスの芸術理念
3. 学会等名 ドイツ近代芸術におけるディレクタンティズム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuko Nakama
2. 発表標題 Das Landschaftsbild bei C. D. Friedrich und japanischen Meistern: Ein kulturwissenschaftlicher Vergleich
3. 学会等名 'Neue Nachbarn', Alte Nationalgalerie, Berlin (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuko Nakama
2. 発表標題 Invisible air: How it is made visible in Japanese art
3. 学会等名 "Landscapes in Art, Theory, and Practice across Media, Time, and Place": Joint Workshop of Kobe University, Ritsumeikan University, and East Asian Art History, FU Berlin (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 仲間裕子
2. 発表標題 フーゴ・フォン・チューディのモダニズムと日本
3. 学会等名 ドイツ・モダニズムの黎明期と日本 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 仲間裕子、竹中悠美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 336
3. 書名 風景の人間学 自然と都市、そして記憶の表象	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----